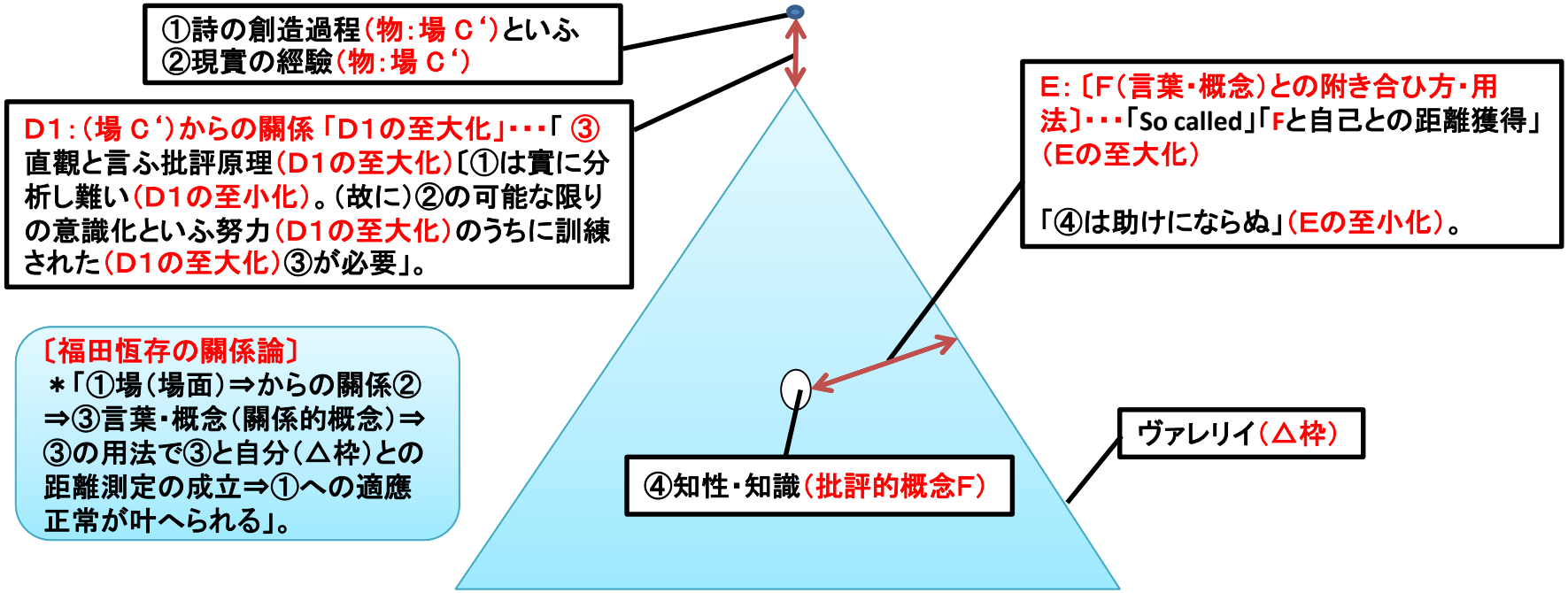
〔難解 小林秀雄には 恒存の關係論が最適〕　《小林秀雄評論 『ヴァレリイ全集』（感想Ⅵ）》 :「直觀と言ふ批評原理」
＊①詩の創造過程（物：場 C ‘）といふ②現實の經驗（物：場 C ‘）⇒からの關係：③直觀と言ふ批評原理（D1の至大化）〔①は實に分析し難い（D1の至小化）。（故に）②の可能な限りの意識化といふ努力（D1の至大化）のうちに訓練された（D1の至大化）③が必要⇒④知性・知識（批評的概念F）⇒④は助けにならぬ（Eの至小化）⇒ヴァレリイ（△枠）。

《原文》＊「私（小林：△枠）としては、批評の精髄（D1の至大化）とでもいふべきものを教へてくれたのはこの人〔ヴァレリイ（物：場 C ‘）〕だと思つてゐる〔即ち『ヴァレリイ（物：場 C ‘） ⇒批評の精髄（D1の至大化） ⇒小林△枠」〕。「ヴァレリイ（△枠）の批評的散文（D1の至大化）の對象（物：場 C ‘）は、文化のあらゆる方面（物：場 C ‘）にわたつてゐる。そのことごとくが、敢へて言へば、たつた一つの批評原理（D1の至大化）に貫かれてゐる。それ〔たつた一つの批評原理（D1の至大化）〕は、詩の創造過程（物：場 C ‘）といふ、自分（ヴァレリイ：△枠）に大變親しい（D1の至大化）が、又實に分析し難い（D1の至小化）現實の經驗（物：場 C ‘）の可能な限りの意識化（D1の至大化）といふ努力（D1の至大化）のうちに育つた（D1の至大化）ものだ。尋常の知性（F）も、專門的な知識（F）も大事なところでは殆ど助けにならぬ（Eの至小化）、この意識化の努力（D1の至大化）のうちに訓練された（D1の至大化）現實（物：場 C ‘）の直觀（D1の至大化）である」〔著『ヴァレリイ全集』（感想Ⅵ）〕。